

## Caves on the Persian Gulf and the possibility of Iranian Buddhism

青木 健

文化・芸術研究センター

AOKI Takeshi

Art and Culture Research Center

本稿は、仏教がイラン高原西部まで及んでいたか否かを論じる試論である。仏教がイラン高原東部（現在のアフガニスタン）まで及んでいたことは、今更論じるまでも無い。この延長線上に、先行研究の一部は、ナウバハールの地名の普及、ゴータマ伝説の普及、イラン・イスラーム神秘主義の思想構造などを根拠として、仏教はイラン高原西部まで到達していたと結論している。しかし、この所説は、未だ定説にはなっていない。

そんな中、筆者は、ペルシア湾岸にある二つの石窟遺跡に注目した。チェヘル・ハーネ石窟とガルアテ・ヘイダリー石窟である。両者は、陸のシルクロードの沿線には無く、イラン高原東部で栄えた仏教遺跡と結び付けて論じるのは無理筋と感じられる。その代わり、ペルシア湾岸からスリランカを結ぶ海のシルクロードの要衝に位置しているので、今後は、インド洋に於ける仏教伝播の一駒として研究する必要があるのではないだろうか。

Several eminent researchers have already accepted the claim that the Buddhism did indeed reach the western Iranian plateau. They thought that they had found some testimonies in favor of the Buddhism's presence in western Iran in ① the Persian place-name "Naw Bahār = (Nava Vihāra in Skt.)," ② the Buddha-legend in Arabic literature (via Manichaean Middle Persian literature), and ③ Iranian Sufism. But they overlooked the more likely archaeological evidences dated to Sasanian time in the Persian Gulf: namely the Chehel Khāne cave and the Qal'at-e Heydarī cave.

In this tentative paper, I would like to argue that both caves can be interpreted as ruins of Buddhism in the western Iranian plateau brought not by way of the Land Silkroad but via the Maritime Silkroad. Because the Sasanian periods seems to have been the acme of the Persian interest in the Maritime trade in the Indian Ocean, many researchers believe that the trade route between the Persian Gulf and Sri Lanka was flourishing. At the present stage of my research, however, there are only circumstantial indications of a possibility of Iranian Buddhism, not a proof.

### 1. 本稿の課題：仏教はイラン高原西部まで伝播したか？

紀元前後の頃、インド亜大陸に発した仏教がハイバル峠を越えてイラン高原東部に西流したとの事実は、バクトリア（現在のアフガニスタン北部）に点在する仏教遺跡から見て、もとより疑いようがない。しかし、仏教伝播の流れは此处から急角度で東流し、パミール高原を越えてタリム盆地（現在の中国新疆ウイグル自治区）へと向かい、遂にイラン高原西部へは到達しなかったとされる。

仏教西漸の限界をバルフ＝カンダハールを結ぶフーシェ・ラインに求めるフーシェ（Alfred Charles Auguste Foucher, 1865–1952）の仮説<sup>1</sup>は既に有効性を失っており、現在知られている仏教遺跡の西端はマルギアナ（現在のトルクメニスタン東部）のギャウル・カラである<sup>2</sup>。21世紀に入ってから、ムルガブ川流域のペンジデフ（現在のトルクメニスタン東南部）やヒンドークシュ山脈中のケリーガーン（現在のアフガニスタン中央部）で仏教遺跡が発見されたとの報告があるものの<sup>3</sup>、いずれもイラン高原東部である。

だが、この当時のシルクロードは、中国と地中海世界を結ぶユーラシア大陸の主要幹線であって、インド亜大陸と中国だけを結んでいた訳ではない。それを考えると、仏教がイラン高原東部から西進しなかったのは不思議である。少なくとも、自然の障害物は何もない。通常、この理由は、「イラン高原西部では、国家宗教として強力な組織力を持つゾロアスター教が仏教の行く手を阻んでいたから」と説明される<sup>4</sup>。

しかし、イラン学から見れば、アルシャク朝時代（前247年～後224年）のゾロアスター教が国家宗教だったとの証拠は見出されておらず、サーサーン朝時代（224年～651年）の「強力無比なゾロアスター教神官団」にしても、9世紀の中世ペルシア語文献にその旨の記述があるだけで、後代の願望を投影した可能性を排除できない。寧ろ、仏教西漸を阻止するような組織力は、当時のゾロアスター教神官団には乏しかったのではないかと推定されている。また、議論の前提として、当時の仏教とゾロアスター教が、一般民衆レベルで截然と区別され得たかと言う宗教習合の問題もある<sup>5</sup>。

このように、自然の障害物も人為的な障害もなかったのだとすれば、「仏教がイラン高原上に西進していなかった」との前提の方が問い直されてしかるべきではなからうか。例えば、マニ教の教祖マーニー（216年～277年）は、開教の初期段階で、メソポタミア平原やイラン高原西部に居ながらにして、意識的に仏教を取り込もうと努力している。これは、一定数の仏教徒の存在を前提にしないと、出て来ない発想である。

また、3世紀のキルデールによるカアベ・イエ・ザルドシュト碑文には、ゾロアスター教が駆逐すべき対象として「シュラマナ＝沙門」の名称が挙がっている<sup>6</sup>。これらを考え合わせると、少なくとも3世紀のイラン高原西部には、ある程度仏教が浸透していた可能性を想定しても良いと思われる。

本稿では、この課題に関して、新説を提示するわけではない。その前段階として、イラン高原のイスラーム化が完了する10世紀以前に、イラン高原上に仏教の痕跡と考えら

れる証拠がないかを概観するのが目的である。

この課題に関する先行研究としては、

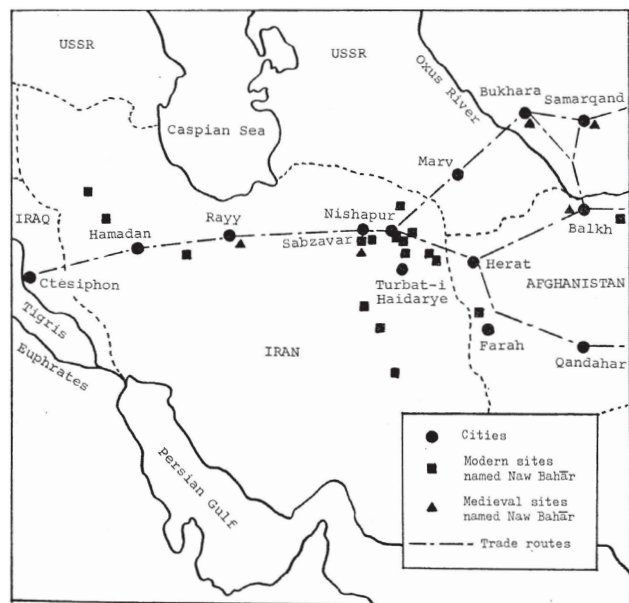
- ①地名に即した考察
- ②思想内容に依拠した考察
- ③仏陀伝説の分布
- ④考古学的成果に依拠した考察

の4つがある。イラン高原上の仏教に関する貴重な先行研究なので、以下で纏めてみよう。

なお、モンゴル人がイラン高原を占領した13世紀に、イラン高原西北部のラサトハーネやヴァルジューヴィーで仏教遺跡が建立されている<sup>7</sup>。しかし、これらは、モンゴル人が新たに中国から齎した13世紀の仏教遺跡であり、インドからイラン高原に直接伝播した仏教を扱う本稿の叙述範囲からは外れる。

**先行研究①ナウバハール**：コロンビア大学イスラーム史教授リチャード・ブリエ（Richard Bulliet, 1940-）は、1976年の論文「ナウバハールとイラン仏教の伝存」<sup>8</sup>の中で、イラン高原上の地名「ナウバハール（Nawbahār）」に着目した。バルマク家<sup>9</sup>の本拠だったバルフのナウバハールは、サンスクリット語ナヴァ・ヴィハーラ（Nava Vihāra）の転訛で、仏教僧院の意味と解される。ブリエは此处から、イラン高原上に現存するナウバハールの地名は、全て嘗ての仏教僧院の所在を示すものと主張し、図1のような地図を得た。

図1：ブリエによるナウバハールの地名分布図（Bulliet 1976, p.141より）



それによると、ホラーサーン州からメソポタミア平原にかけて、イラン高原北部を横断するキャラバン・ルート沿いにナウバハールの地名が見出されており、これが仏教西進の痕跡とされる。また、ブリエは、「ヴィハーラ＝僧院」に「ナヴァ＝新しい」との形容詞が付くのは、バクトリアで新たな「イラン的仏教」が形成されたからであり、サーサーン朝時代にキルデルに迫害された仏教も、この「イラン的仏教」に違いないと推測している。但し、その「イラン的仏教」とは具体的に何なのかは、一向に不明であるが。

このブリエの研究手法を踏襲し、直接アドバイスを得つつ、データを精緻化した研究成果が、榎原考古学研究所研究員の土橋理子とイラン考古学センター研究員のハミード・ファヒーミーが2006年に公表した「ノウバハールと名付けられた地点の調査」<sup>10</sup>である。その手法は、イランの最新地図でナウバハールとの地名をピックアップし、そのうち19地点を実際に訪れるというものであった。その結果、周辺の宗教施設（おそらくシーア派のエマーム・ザーデ）での民間信仰の記録を得ている。

その後、イランの仏教を扱った論文で、このナウバハール論はしばしば引用されるようになった<sup>11</sup>。また、イラン高原上の地名の語源を探ると言う研究手法の派生的成果として、「チャーバハール（スィースターン・バルーチスタン州の港町）」は「シャー・バハール」が原義で「王の仏教僧院」を意味するとか、「ザーヘダーン（同じくスィースターン・バルーチスタン州の内陸都市）」はアラビア語で「禁欲者たちの町」の意味で、「（仏教）修行者たちの都市」を示唆するといった仮説が立てられた<sup>12</sup>。但し、この方法論を無制限に応用していくと、イラン高原上の全ての地名が仏教に結び付けられそうなので、どこかで適切な歯止めが必要だと思われる。

**先行研究②イスラーム神秘主義**：思想研究の方面では、インド思想からイスラーム神秘主義への影響に関する仮説は、19世紀からvon Kramer, Dozy, Max Hortenらによって提唱された<sup>13</sup>。仏教からイスラーム神秘主義への影響に関しては、1903年にI. Goldziherが「イスラーム神秘主義とはイスラーム化された仏教である」との仮説を唱えた<sup>14</sup>。ホラーサーンで発展したハディース蒐集も、大乘仏教のストゥラ文化の影響下に成立したと推定された<sup>15</sup>。20世紀後半には、S. Naficyがこの立場を推進し<sup>16</sup>、井筒俊彦も（仏教思想ではないが）ヒンドゥー教思想からイスラーム神秘主義への影響を肯定した<sup>17</sup>。

思想史的観点から言えば、イスラーム神秘主義の源流は、10世紀以前のイラク系禁欲主義とホラーサーン系禁欲主義（zubd）に分類される。本来は別系統で発生した禁欲主義が、スラミー（1020年没）によって「タサウフ（イスラーム神秘主義）」の名称の下に統一されたとの通説である<sup>18</sup>。ここに、独特のホラーサーン禁欲主義（マラーマティー派を含む）の形成に、イラン高原東部に先行して定着していた仏教が関与した可能性があるとの説が成立する余地がある。但し、あくまで思想上の類似性、地理的な一致、時代的な前後関係と云った状況証拠の積み重ねに依拠した仮説である点に注意しなくてはならない。特に、思想上の類似性については、後代の視点から見て何とでも言えるところがあるので、慎重になるべきである。

別の方面からの仏教の影響の指摘もある。ソグディアナのアフシャナ（現在のウズベキスタンのブハーラー市郊外）出身のイブン・スィーナ（Ibn Sīnā, 980-1037）の父称に当たるスィーナは、長らく解釈不能だった。例えば、五十嵐一は、スィーナを、アラビア語で中国を表すスィーンに引き当てて、「中国人」の意味だとしている<sup>19</sup>。だとしたら、イブン・スィーナの祖先は中国人だったことになるだろう。

また、これをBuddhasena（禅師として有名なブッダセーナ、漢訳で佛大先）と云うサンスクリット語の人名の

略称とする指摘が存在する<sup>20</sup>。仮にそうだとしたら、不世出のイスラーム哲学者の祖先は、仏教徒だったことになる。但し、全ては大哲学者の語源不明の姓（と云う概念はイラン世界にはないが）の解釈に依拠した仮説である。

以上、仏教からホラーサーン神秘主義への影響を立証する決定的な証拠はない。ここで挙げたのは、仏教が衰退しつつあった10世紀以前のイラン高原東部で、独特の禁欲主義の萌芽が見られたと云う状況証拠と、それを支えるかも知れない幾つかの語源解釈論である。

**先行研究③ブッダ伝説：**仏陀伝説は、8世紀にアラビア語訳され、イスラーム文化圏で拡散した。イブン・ムカッファウ（757年処刑）が中世ペルシア語から翻訳したとされる『ピラウハルとブーダーサフ（*Bilawhar wa Būdāsaf*）』のアラビア語版は失われたが、そこから派生した幾つかのバージョンが伝播し、イブン・バーバワイヒ・クンミー（991年没）の12イマーム・シーア派伝承や、イスマーイル派のイフワーン・サファール（10世紀後半）などに収録された<sup>21</sup>。

但し、これは、インド亜大陸の仏教徒から直接伝承されたわけではない。先行研究に拠れば、アシュヴァゴーシャによる『ブッダ・チャリタ』は、一旦中央アジアでマニ教徒によって中世ペルシア語（或いはパルティア語）に翻訳され、マニ教文献化すると云う段階を踏んでから、アラビア語訳されている<sup>22</sup>。

つまり、イスラーム圏に導入されたブッダは、仏教の開祖ではなく、マニ教の聖人として捉えられた「マニ教のブッダ」であり、以後マジュレスィー（1700年没）による近世ペルシア語訳に至るまでのイスラーム圏のブッダ伝説は、色濃くマニ教的である。筆者は、これを「仏教の仏陀伝説」とは区別して、「マニ教のブッダ伝説」と名付けるべきだと思う。これを以て仏教伝播の痕跡とは見做せないの、本稿では、このイスラーム圏の「マニ教のブッダ伝説」は扱わない。

**先行研究④考古学的成果：**2002年にペルシア州で仏像が出土したとの樋口隆康氏の説は既に撤回されているものの<sup>23</sup>、2006年には、イラン国立博物館に5点の石製の仏像と3点のテラコッタ製の仏像、及びニーシャープール博物館に1点の仏像が収蔵されているとの報告書が公表されている<sup>24</sup>。何れもガンダーラ様式だが、全て出土地不明である。

また、ニーシャープール近郊のシャーディヤーフからは、仏教的意匠を持ったテラコッタ・プレートが出土し、ニーシャープール考古学センターで保管されている<sup>25</sup>。更に、アシハバードのトルクメン歴史博物館には、マルギアナから出土した紀元前1世紀～紀元後5世紀の仏教遺物100点前後が収蔵されているものの、研究は進んでいない<sup>26</sup>。

## 2. 本稿の焦点：ペルシア湾岸の石窟遺跡

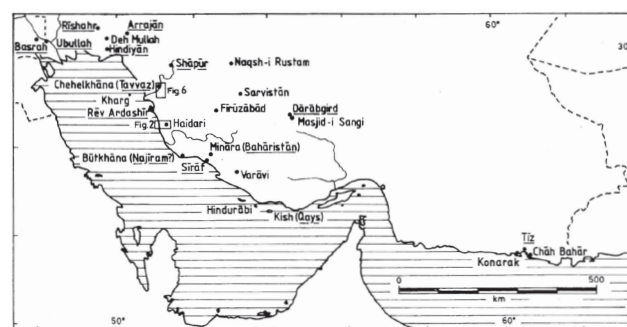
**フーシェ・ラインを越えて：**上述の先行研究は、方法論に差異はあるが、バクトリアを起点とし、ここから如何にして仏教が西進したかと云う観点で構築されている。バクトリアからマルギアナに至る地域では、確実な仏教遺跡が存在しているのであるから、そこで得られた資料状況を西に拡張する研究手法は有効と思われる。

だが、先行研究が既に指摘していながら、フーシェ・ラインの西方で整合化されていない考古学遺跡が2つある<sup>27</sup>。それが、ペルシア湾岸のチェヘル・ハーネ石窟とガルアテ・ヘイダリー石窟である。これらの遺跡とペルシア湾の意義が、本稿の主題である。

2つの遺跡は、1969年にアフマド・エグテダリーが存在を公表し<sup>28</sup>、1975年にワルウィック・ボールとホセイン・バフティヤリーが調査して、1976年に報告書を提出した<sup>29</sup>。その後、1986年にボールがダーラブギルド遺跡も含めた研究論文を公表したものの<sup>30</sup>、イラン革命（1979年）、イラン・イラク戦争（1980年～1988年）、湾岸戦争（1990年～1991年）、イラク戦争（2003年）と続いたペルシア湾岸地域の混乱の為に、学術的調査は中断したままである。少なくとも筆者は、これらの遺跡に関する研究論文を見ていない。

位置については図2参照。サーサーン朝最大のペルシア湾岸貿易港レーヴ・アルダフシール（現在のプーシェフル近郊）を起点にとると、チェヘル・ハーネ石窟は内陸70キロ地点、ガルアテ・ヘイダリー石窟は東南60キロ地点に当たる。

図2：チェヘル・ハーネ石窟とガルアテ・ヘイダリー石窟の位置（Ball 1986, p.107より）



外観については写真1と2を参照。両者とも、川岸の断崖絶壁に横穴を穿った形式で、チェヘル・ハーネ石窟は30の開口部、ガルアテ・ヘイダリー石窟は14の開口部を有する。各層の開口部は、内部で連結しているとされる。

先行研究によると、石窟内部から文字資料は発見されていない。発掘者のボールは、サーサーン朝建築に特有の楕円型アーチ<sup>32</sup>の円蓋が多用されている点を根拠として、これらをサーサーン朝期からイスラーム初期（3世紀～10世紀）に造営された石窟と推測した<sup>33</sup>。

用途については、実用目的で川岸の断崖絶壁に石窟を造営するとは思えないので、宗教的な利用と考察した<sup>34</sup>。どの宗教に帰属するかについては、断定は避けつつも、「平面プランからみれば、両遺跡はネストリウス派キリスト教に属する可能性が高いが、東方 [=ここではアフガニスタンを指す] の仏教僧院の特徴も併せ持っている」と結論付けている<sup>35</sup>。

細かく見ると、チェヘル・ハーネ石窟とガルアテ・ヘイダリー石窟の両者にも区別が必要である。チェヘル・ハーネ石窟は、港湾都市レーヴ・アルダフシールからペルシア州の都市バイ・シャープフルに至る幹線上に位置し、近隣にはキャラバン都市タツヴァズが控えている。これは、サー



写真1：チェヘル・ハーネ石窟（2020年5月26日 Daryoosh Akbarzadeh教授撮影<sup>31)</sup>）



（険しい断崖絶壁の上に開口部がある構造である。手前に川が流れている。）

写真2：1976年当時のガルアテ・ヘイダリー石窟（Ball 1986, p.113より）



（こちらも、断崖絶壁に横穴を穿って石窟を造営する構造である）

サーン朝時代の交易ルートを意識した立地条件である。しかし、ガルアテ・ヘイダリー石窟は、幹線道路からは隔たっており、交易ルートから意図的に外れていたと考えられる。

ボールによると、ガルアテ・ヘイダリー遺跡は未完成のまま放置されたと推測され、予想でしか完成形態を判断できず、チェヘル・ハーネ遺跡に比べて評価が難しい<sup>36)</sup>。エグテダリーはこれを仏教石窟かヒンドゥー教石窟と捉え<sup>37)</sup>、ヴァズイーリーも賛同している<sup>38)</sup>。しかし、下記の写真から分かるように、未完成形態だった筈のガルアテ・ヘイダリー遺跡は、近年「公園」として、盛り土の上で「整備・修復」されてしまい（写真3と写真4参照）、1976年当時の面影はない。

**スィンド地方の仏教か？**：筆者は、このペルシア湾の両石窟に興味を持ち、仏教的特徴とされる「僻遠の立地、断崖絶壁の横穴、回廊式“ストゥーパ”、外面の仏龕、内面の仏龕」を実見する計画を立て、2020年2月のイラン渡航を期していた。ゾロアスター教やイスラーム神秘主義では、

写真3：現在のガルアテ・ヘイダリー石窟①（2020年10月26日 Daryoosh Akbarzadeh教授撮影）



（近年、外階段が設置され、公園化したガルアテ・ヘイダリー石窟）

写真4：現在のガルアテ・ヘイダリー石窟②（同上）



（近年、「整備・修復」されてしまったガルアテ・ヘイダリー石窟内部）

磨崖絶壁の石窟で独座するような修行方法は一般的ではないから（イスラーム神秘主義に関しては、中央アジアに於けるヤサヴィー教団など、少数の事例が報告されている）、帰属宗教の考察範囲をネストリウス派キリスト教と仏教に絞る点には、先行研究に賛成であった。

しかし、機材の準備も虚しく、covid-19の世界的流行によって調査は不可能となった。現状では、イラン調査の目処は立たないので、それに先立って、とりあえず個人的な推測を纏めておきたい。

先に、地理的条件に関するボールの見解を参照しよう。ボールは、上記の石窟が仏教遺跡と仮定した場合、その伝播経路を陸のシルクロードに求めてはいない。ペルシア湾岸にインド風の地名が多いことを根拠に、インドとの海洋貿易に伴って仏教が伝播したと見ている。

彼が強調するのは、インダス川河口付近のスィンド地方である。3世紀初頭にマーニーがここに渡って2年間仏教を学んだとの伝承が、この判断の背景にある。そして、イ

ラン高原東部の仏教石窟とペルシア湾岸の両石窟の類似性を根拠として、チェヘル・ハーネ石窟とガルアテ・ヘイダリー石窟が仏教遺跡である可能性を説いた。

筆者は、インド洋を介した伝播に着目した点では、この推論に賛成であるが、なお幾つかの問題があると考えている。第一に、サーサーン朝のインド洋貿易の対象をインド地方に限定する必要はない<sup>39</sup>。現在では、もう少し研究が進んでいる。第二に、インド地方の石窟とイラン高原東部の石窟が同一プランで構想されている確証がない以上、ペルシア湾岸の石窟とイラン高原東部の石窟の類似性が、インド地方の仏教がそのまま伝播した証明にはならないだろう。

サーサーン朝時代の海洋貿易：以下では、1986年以降のインド洋貿易研究を紹介しつつ、2020年段階でのサーサーン朝の海洋進出を検討したい。湾岸の考古学的資料は、1980年代と比べて、そこまで拡充されていない。ペルシア湾岸の都市で調査されたのはスィーラーフ港のみで、ここで中国陶器の破片が発掘されるのは800年代以降の層である<sup>40</sup>。残念ながらレーヴ・アルダフシールの発掘が行われていないのだが<sup>41</sup>、スィーラーフの状況に照らせば、サーサーン朝ペルシアは中国と直接貿易は行っていなかったと考えられている<sup>42</sup>。

家島によると、9～10世紀のペルシア湾岸の諸都市からの航海ルートは、スィンドのダイブールからインド西海岸を経て、セイロン島のマンタイ港まで及んでいる（図3参照）。イスラーム期にはいつてからのインド洋香辛料貿易からの類推だが、航海ルート自体はサーサーン朝時代から変わっているとは思われない。

図3：9～10世紀のインド洋貿易の航海ルート（家島  
1989年、p.124より）



6世紀のエジプトの修道士Cosmas Indicopleustesの著作は、インド洋貿易に於けるセイロン島の重要性を強調している<sup>43</sup>。ペルシアからセイロンへの輸出品は馬で、セイロンからペルシアへの輸入品は中国製絹、香料、スパイスであった<sup>44</sup>。

タバリー（923年没）によると、サーサーン朝皇帝ヴァフラーム5世ゴール（在位420～438年）は、スィンド王の王女と結婚し、婚資としてインダス川下流域のデーバル港を受け取ったとされる。6世紀前後のサーサーン朝の貿易商人は、スィンド地方を介してセイロン島まで赴き、存

在感を示していたようである。

**セイロン島とサーサーン朝ペルシア**：ここまでで、サーサーン朝期のインド洋貿易の焦点は、1980年代に想定されていたようなスィンド地方ではなく、寧ろセイロン島である可能性の方が高まったと思われる。筆者はここに着目し、イラン高原東部よりも、セイロン島からの仏教伝播の可能性を探るべきではないかと考えている。以下では、セイロン島研究の側から、サーサーン朝ペルシアの痕跡がないかを探ってみよう。

スリランカ北部の貿易港マンタイで発見されたサーサーン朝の封泥は、長らく未公開であったが<sup>45)</sup>、2012年に公開された<sup>46)</sup>。これによって、サーサーン朝の官職者によって封泥を施された荷物が、マンタイまで渡来していたことは確実にした。エーラーン帝国の官許による貿易網は、少なくともセイロン島まで達していた。

セイロン島に於けるサーサーン朝の軍事的プレゼンスを示す伝承も存在している。5世紀の伝承を反映した石柱碑文によると、シンハラ王朝のダートゥッセナ王（在位455年～473年）は、王位を得る為に、サーサーン朝皇帝ペーローズ1世（在位459年～484年）によってペルシアやスイスターンを追われたサカ族の傭兵の助けを借りたとされる<sup>47）</sup>。

タバリーによると、サーサーン朝皇帝ホスロー1世（在位531年～579年）は、セレンディープに大軍を送り込んで武力進駐したとされる<sup>48</sup>。あくまで伝承ではあるが、セイロン島の側でも、イスラーム資料でも、揃ってセイロンに於けるイラン系の軍事力の存在に言及している点は重要である。

スリランカのシンハラ語年代記*Culavamsa*に拠れば、ダートゥセーナの息子カッサパ1世は、シーギリヤ山頂にペルシア風のハシュト・ベヘシュト風の庭園と宮殿を築造していたとされる<sup>49</sup>。筆者は、5世紀にシンハラ王朝がペルシア庭園を造営していたかどうかについての判断は下せない。しかし、この指摘は、5世紀のセイロン島にイラン系文化が及んでいた可能性を示唆する。

**セイロン島とマガ・ブラーフマナ**：以上はサーサーン朝と云う国家の枠組みでのイラン・セイロン関係の検討だった。以下では、ゾロアスター教神官団の移住と云う観点から、この問題を追及しよう。

現在まで、「マガ・ブラフマナ (Maga Brāhmin)」といえ、『サーンバ・ブラーナ』や『バヴィシュヤ・ブラーナ』に在証されるような、北インドに移住した太陽崇拝のゾロアスター教徒を指すと考えられてきた<sup>50</sup>。しかし、紀元後2世紀のプトレマイオスの著書『地理学』によると、「ブラフマナイ・マゴス」なる集団が、ブランメーと称されるデカン高原以南の都市に集住していた<sup>51</sup>。

また、上述のダートゥッセーナ王の宮廷には、同様に「マガ・ブラーフmana」と称される廷臣が仕えており、「ペルシアの宗教 (Pārasika-samayan)」を奉じていたとされる<sup>52</sup>。彼らが、北インドのマガ・ブラーフmanと如何なる関係にあるのか、現段階では定かではない。しかし、この記述は、北インドに移住したゾロアスター教徒とは別系統のゾロアスター教徒が、ずっと後の時代に、南インドやセイロン島に移住していた可能性を提示する。

筆者は、サーサーン朝時代のゾロアスター教神官団が、インド洋の海上交通路に即して、南インドやセイロン島へ



移住した可能性を想定している。ゾロアスター教徒には日々の拝火儀礼が欠かせないので、現地在住のゾロアスター教徒商人の宗教的需要を満たす為の移住である<sup>53</sup>。そして、そうだとしたら、その逆に、ペルシア湾岸に駐在するセイロン人仏教徒商人の需要を満たす為、セイロン人僧侶がペルシア湾岸へ移住した可能性を論じてもし支えないだろう。

### 3. 本稿の検討：先行研究との照合

次に、本稿1. で挙げた4つの先行研究が、本稿2. で提起した「セイロン島からインド洋貿易を介してペルシア湾岸へ到達した仏教石窟の可能性」に対して、どのような整合関係にあるかをチェックし、今後の研究に繋げたいと思う。

**先行研究①ナウバハールとの照合：**下記の図4が、榎原考古学研究所が2005年に実施したイランに於けるナウバハールの地名調査の精緻化の成果である。筆者は、現存するナウバハールの地名が、全て仏教寺院ノヴァ・ヴィハーラに由来しているとの前提に必ずしも賛成しない。ペルシア語の「ナウバハール」＝「新春」との地名は、もっと他の要因によって付けられる可能性があると思う。

図4：ナウバハールの地名調査の精緻化 (Tsuchihashi and Fahimi 2006, p.30より)



fig. 3 Map of sites surveyed in 2005 and places named Now Bahār

しかし、仮に何割かに仏教寺院由来の可能性が認められるとしたら、ナウバハールの地名調査は、イスラーム以前の「イラン高原東部由来」の仏教寺院の分布の割合を、ある程度反映するかも知れない。而して、その分布は、イラン高原東北部ホラーサーン州からイラン高原西部ハマダーン州～マルキャズィー州に集中しており、逆にペルシア湾岸ではほとんど見受けられない。

これは、バルフに発する「仏教僧院」由来の地名が、陸のシルクロードを経由して内陸部に拡散した可能性を示唆している。性急な結論は避けるべきだが、ペルシア湾岸の石窟が仏教遺跡だった場合、その伝播経路は陸のシルク

ロードではなく、海のシルクロードである可能性の方が高いのではないだろうか？

**先行研究②イスラーム神秘主義との照合：**ホラーサーン神秘主義の形成を大乘仏教の影響とする議論が成立する理由は、この地域の先駆的スーフィーが9世紀頃から活躍を始め、大乘仏教とホラーサーン神秘主義を時間的に接続する余地が残されていたからである。では、この議論は、ペルシア湾岸地域に応用可能だろうか？

ペルシア州で確認される最古のスーフィー教団は、アブー・イスハーク・カーゼルーニー（1035年没）が設立したカーゼルーニー教団である。これは、既にハッラージュ（922年没）に対するホラーサーン神秘主義の影響が明らかになってから100年以上が経過した後である。仮にこの時期以前にペルシア州に独自の神秘主義の萌芽があったにせよ、その痕跡は東から到来したホラーサーン神秘主義によって覆われている。

また、10世紀以前の「ペルシア州に於けるイスラーム神秘主義」の想定は、この地域でゾロアスター教神官団がサーサーン朝崩壊後に却って組織力を強めていた為に、極めて難しい。9～10世紀のペルシア州の農村部は、ゾロアスター教神官団に最後に残されたイラン高原の拠点であり、イラン高原上でイスラームへの改宗が最も遅れた地域とされる。従って、仮に10世紀以前のペルシア州にスーフィー教団があったとしたら、資料に残りやすい都市型の教団が想定される。しかし、現状では、そのような教団は資料上確認されていない。

即ち、10世紀以前のペルシア州に独自のイスラーム神秘主義の痕跡は、ホラーサーン神秘主義とゾロアスター教神官団と云う二重の帳によって覆われている。仮にペルシア湾岸に仏教文化が栄えていたにせよ、イスラーム期の神秘主義関連の資料からその思想的影響力を立証する術は無いだろう。

**先行研究③ブッダ伝説との照合：**先行研究における「イスラームのブッダ論」は、マニ教の聖人化したブッダ伝説が、主として12イマーム・シーア派文献に採録されたものだった。つまり、直接的な仏教文化の波及ではなく、マニ教を仲介しての二次的な波及である。確かに、これによってブッダ伝説はイスラーム文化の中に組み込まれたが、ここからペルシア湾岸の仏教の可能性を導くことは出来ないだろう。

これに代えて、本稿では新たな論点を提起しておきたい（本稿では提起するだけである）。即ち、筆者は、イランのブッダ伝説に関しては、ペルシア湾岸のヒドゥル伝説との習合に注目するべきだと考えている<sup>54</sup>。通常、ウイスイー的な（自己完結型の）スーフィーの祖とされる「緑の預言者」ヒドゥルだが、サアーリビー（1038年没）やシャフラスターニー（1153年没）は、これをブッダと同一視しており、11世紀以降はヒドゥルとブッダの習合が進んでいたようである。

而して、ヒドゥルと関連付けられた聖地は、特にペルシア湾岸とスリランカに多いとされる<sup>55</sup>。このうち、ペルシア州に関しては、筆者自身の経験から、ヒドゥル廟の多さを実感できる。また、スリランカの仏足石アダムズピークは、イスラーム教徒旅行家イブン・バットウータによってヒドゥルのものと伝聞されている。

このヒドゥル廟の分布については、ヒドゥルとブッダの習合と云う観点から見る必要があると思う。即ち、先行する仏教寺院や仏教遺跡が、イスラーム化の過程でヒドゥル廟に置き換えられていった可能性である。そうだとすれば、現在ヒドゥル廟が建っている地点には、嘗て11世紀以前？は仏教寺院が建っていたのかも知れない。

そして、ここが肝心な点だが、マニ教徒がインド洋貿易に関与した証拠がない以上、このペルシア湾岸のヒドゥル伝説にマニ教が介在したとは思えない。即ち、仮にこれがブッダと関連付けられるとした場合、こちらこそ純粋な「仏教のブッダ伝説」のイスラーム圏伝播である。ペルシア湾岸とスリランカにおけるヒドゥル廟は、海のシルクロードを伝った南伝仏教のイラン伝播と云う観点から、もう一度捉え直されるべきではないだろうか。

**先行研究④考古学的成果との照合：**ホラーサーンやマルギアナの仏教遺物の発掘成果は貴重だが、それ自体が確立された情報ではない上に、ペルシア湾岸では仏教遺物発掘の報告が無い。現状では、この先行研究をペルシア湾岸の仏教研究に応用する目処は立っていない。

#### 4. 暫定的結論：ペルシア湾岸仏教の可能性

本稿では、イラン高原西部へのインド仏教の伝播を考察対象とし、まずは先行研究を纏めた。それらは、バクトリアの大乗仏教が西進した可能性を探るものだった。しかし、それらは仮説としては魅力的であるものの、決定的な証拠を欠いており、全ては推論に留まっていた。

そこで、筆者は視点を変えてペルシア湾岸の2つの石窟に注目し、ペルシア湾岸仏教の可能性を探った。2つの石窟のうち、チェヘル・ハーネ石窟は1976年当時のまま伝存しているが、ガルアテ・ヘイダリー石窟は「修復」されてしまい、公園と化している。2019年末の段階では、前者の内部調査と後者の平面図調査を通して、これらが仏教遺跡なのかどうかを検証したいと考えていた。

しかし、2020年2月に予定していたこの調査は、covid-19の世界的流行によって、遅延を余儀なくされた。そこで、本稿では、現地調査に先んじて、ここが仏教遺跡である可能性を探る作業仮説を提示した。先行研究の成果を活用した結果、陸のシルクロードを介してペルシア湾岸にバクトリアの大乗仏教の影響が及んでいた可能性は低いことが確認された。寧ろ、海のシルクロードを伝って、スリランカからペルシア湾岸に仏教文化が渡来していた可能性の方が高いと考えられた。

今後は、covid-19の終息後、なるべく早期にペルシア湾岸の石窟遺跡の調査を実行したい。また、それと共に、スリランカからペルシア湾岸を繋ぐライン上の「海のシルクロードの仏教遺跡」を探究し、イラン高原西部の仏教研究を推進したい。

仮にペルシア湾岸に仏教が伝播していたとすると、3世紀の初期マニ教理解、9～10世紀の初期ペルシア・スーフィズム理解に直結するだろう。即ち、前者は、3世紀のマーニーが、メソポタミアに居ながらにして仏教思想に触れ、開教初期の段階で仏教思想の影響を蒙っていた可能性である。また、後者は、カーゼルーニー教団以前のペルシア州のイスラーム神秘主義思想が、仏教思想の影響を受けてい

た可能性である。

これに加えて、この方向での研究は、「インド洋貿易を介したイラン・インド間の思想伝播」の可能性として、西アジア思想史に新たな理解のフレームを提示することになるだろう。もちろん、歴史学上のインド洋のネットワーク研究にも、新たな可能性を提供すると思われる。

- <sup>1</sup> A. Foucher, *La Vieille route de l'Inde de Bactres à Taxila*, Paris, 1947, pp. 280-285参照。
- <sup>2</sup> ギャウル・カラで、4～6世紀と推測されるストゥーバやサンスクリット語写本が発見されている。G. Kosheleko, "The Beginning of Buddhism in Margiana," *Acta Antiqua Academiae Scientiarum Hungaricae* 14, 1966, pp. 175-83参照。
- <sup>3</sup> ペンジデフ(現在のタグタバーザール)については、入澤崇、「バミヤーン以西で新たに見つかった仏教遺跡」、『印度学仏教学研究』第56巻第1号、2007年、pp.256-263参照。ケリーガーンについては、入澤崇、「ムルガブリ川流域への仏教伝播」、『印度学仏教学研究』第57巻第1号、2008年、pp.89-96参照。後者の詳細については、入澤崇(編)、『パンデ・アミール川上流域の古代ルートと遺跡の調査』、及び龍谷大学アフガニスタン学術研究プロジェクト(編)、『アフガニスタン仏教遺跡学術調査研究シンポジウム：人類の至宝アフガニスタン～仏教西漸～』、2010年を参照。
- <sup>4</sup> 日本語による概説として、森本公誠、「イラン人もかつては仏教徒だった」、「オリエントとは何かー東西の区分を超えるー」、藤原書店、p.202参照。
- <sup>5</sup> 具体例として、テルメズ近郊のカラ・テペで出土した「ブッダ・マスター」の壁画(クシャーナ朝時代)を挙げたい。Boris J. Stavinsky, "Buddha-Mazda from Kara Tepe in Old Termez (Uzbekistan): A Preliminary Communication," *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 3/2, pp. 89-94, 1980.
- <sup>6</sup> キルデールのKKZ碑文の翻訳としては、Michael Back, *Die sassanidischen Staatsinschriften*, *Acta Iranica* 18, Tehran and Leiden, 1978, p.234参照。
- <sup>7</sup> Warwick Ball, "How far did Buddhism spread West? -Buddhism in the Middle East in Ancient and Medieval Times-," *al-Rafidān*, vol.10, 1989, p.8参照。
- <sup>8</sup> Richard W. Bulliet, "Naw Bahār and the Survival of Iranian Buddhism," *Journal of Persian Studies* 14, 1976, pp.140-145参照。
- <sup>9</sup> 8世紀後半にアッバース朝の宰相を輩出したバクトリアの一族。本来は、バルフのナウバハール仏教僧院の指導者だった。803年に、ハーレーン・アッラシードによって族滅された。
- <sup>10</sup> Riko Tsuchihashi, Hamid Fahimi, "Research on the Places named Nowbahār," *Report of the Iran-Japan joint research on the Diffusion of Buddhism in Iran*, Archaeological Institute of Kashihara, Nara Prefecture, 2006, pp.5-62参照。ノウバハールは、ナウバハールの現代ペルシア語発音。この報告の日本語要約版としては、土橋理子、「イランにおける仏教西伝の探査」、「シルクロードを行く」、奈良県立橿原考古学研究所付属博物館、pp.31-37参照。
- <sup>11</sup> Richard Foltz, "Buddhism in the Iranian World," *Muslim World* 100, 2010, p.207参照。
- <sup>12</sup> Mostafa Vaziri, *Buddhism in Iran: an Anthropological Approach to traces and Influences*, Palgrave Macmillan, 2012, p.101参照。
- <sup>13</sup> Max Horten, *Indische Strömungen in der islamischen Mystik*, 2 vols, Heidelberg, 1927-28参照。
- <sup>14</sup> I. Goldziher, "The Influence of Buddhism upon Islam," *JRAS*, 1904, pp.125-141参照。
- <sup>15</sup> Vaziri 2012, p.139参照。
- <sup>16</sup> S. Naficy, *Sar Cheshme-ye Tasavvof dar Īrān*, Tehran, 1964参照。
- <sup>17</sup> 井筒俊彦、「TAT TVAM ASI(汝はそれなり)ーバーヤジード・バスターミーにおけるペルソナ転換の思想」、「イスラーム思想史」、中公文庫、1991年、pp. 420-491参照。
- <sup>18</sup> L. Rugeon, *Morals and Mysticism in Persian Sufism: A History of Sufi-futuwwat in Iran*, Routledge, 2010参照。
- <sup>19</sup> 五十嵐一、『東方の医と知 イブン・スィーナー研究』、講談社、1989年、pp.98-99参照。
- <sup>20</sup> G. Lühling, "Ein anderer Avicenna," *Zeitschrift der deutschen morgenländischen Gesellschaft* Suppl. 3/1, 1977, pp.500-502参照。

- <sup>21</sup> 日本語の概略としては、菊池達也、「イスラームにおける仏陀イメージ」、『国士館哲学』、第7号、2003年、pp.138-148参照。
- <sup>22</sup> F. Mojtahāī, "Belovhar va Būdāsaf," *Dā'irat al-Ma'āref Bozorg-e Eslāmī*, vol. 12, 2004; W. Sundermann, "Die Bedeutung des Partischen für die Verbreitung buddhistischer Wörter indischer Herkunft," *Manichaica Iranica* vol. 1, Rome, 2001参照。
- <sup>23</sup> シーラーズで仏像が出土したとの樋口隆康氏の仮説については、"Statues in Iran challenge theories on Buddhism's Spread," *The Japan Times*, 14 May 2002参照。
- <sup>24</sup> Akio MIYAJI, "The Buddhist Sculptures in the Museums of Iran," *Report of the Iran-Japan joint research on the Diffusion of Buddhism in Iran*, Archaeological Institute of Kashihara, Nara Prefecture, 2006, pp.77-84参照。
- <sup>25</sup> Toh SUGIMURA, "An Essay on the Terra-Cotta Plaque unearthed at Shadiyakh, Khorasan," *Report of the Iran-Japan joint research on the Diffusion of Buddhism in Iran*, Archaeological Institute of Kashihara, Nara Prefecture, 2006, pp.85-90参照。
- <sup>26</sup> Foltz 2010, p.206参照。
- <sup>27</sup> Ball 1989, pp.7-8参照。日本語論文の中では、入澤崇、「イランの仏教遺跡」、『印度学仏教学研究』第58巻第1号、2009年、pp.346-339参照。
- <sup>28</sup> Ahmad Eqtedārī, *Āthār-e Shahr-hā-ye Bāstānī: Savāhel va Jazā'ir Khālīj-e Fārs va Daryā-ye Omān*, Tehrān, 1969, pp.233ff.参照(アフマド・エグテダーリー、『古代都市の遺跡：ペルシア湾とオマーン海の海岸と島々』、テヘラン)。本書は、ペルシア湾岸の他の石窟についても、有益な情報源である。
- <sup>29</sup> W. Ball and David Whitehouse, "Qal'at Haidarī," *Iran: British Institute of Persian Studies* 14, pp.147-150, 1976.
- <sup>30</sup> W. Ball, "Some Rock-cut Monuments in Southern Iran," *Iran: British Institute of Persian Studies* 24, pp.95-115, 1986.
- <sup>31</sup> 最新の写真を撮影して提供して下さったICHTO(イラン文化遺産・観光・手工芸省)のDaryoosh Akbarzadeh教授には、記して感謝申し上げたい。
- <sup>32</sup> チャハール・タークと共通する建築様式。イスラーム期には尖塔型アーチが主流になる。
- <sup>33</sup> Ball 1986, p.103参照。
- <sup>34</sup> Ball 1986, pp.105-106参照。
- <sup>35</sup> Ball 1986, p.112参照。
- <sup>36</sup> W. Ball and David Whitehouse, "Qal'at Haidarī," *Iran: British Institute of Persian Studies* 14, pp.147-150, 1976参照。
- <sup>37</sup> Eqtedārī 1969, p.243参照。
- <sup>38</sup> Vaziri 2012, p.83参照。
- <sup>39</sup> イスラーム教徒の侵攻直前の8世紀のシンド地方に、商業に従事する仏教徒が多かったことは疑えない。Karam Tej Sarao, "Buddhist-Muslim Encounter in Sind during the Eighth Century," *Bulletin of the Deccan College Post-Graduate and Research Institute* Vol. 77 (October 2017), pp.75-94参照。
- <sup>40</sup> H. R. Pashazanous, M. Montazer Zohouri and T. Ahmadi "Sea Trade between Iran and China in the Persian Gulf based on the Excavations of Siraf City," *Indian Journal of Economics and Development*, Vol. 2 (2), pp.6-13, Feb. 2014参照。
- <sup>41</sup> レーヴ・アルダフシール(と考えられる地点)の表面地層では、インド製赤色陶器が発見されている。David Whitehouse and Andrew Williamson, "Sasanian Maritime Trade," *Iran: British Institute of Persian Studies* 11, pp.29-49, 1973参照。こちらでも、インド洋貿易の存在自体は立証されている。
- <sup>42</sup> 角杯を基準にした場合、前漢代に、イラン・イラクに特有の角杯が、広州の南越王墓から出土している。この頃から、華南と西アジアの海洋交易上の繋がりはあったようである。山田俊輔、「角杯に見るユーラシアの東西交流」、『中国シルクロードの変遷』、雄山閣、2007年、pp.192-205参照。
- <sup>43</sup> Cosmas Indicopleustes, *The Christian Topography of Cosmas*, an Egyptian Monk, tr. by McCrindle, 1897, pp. 336-339参照。
- <sup>44</sup> J. Kröger, "Sasanian Iran and India: Questions of Interaction," *South Asian Archaeology 1979*, Berlin: Dietrich Reimer Verlag, 1981, pp. 441-448参照。
- <sup>45</sup> R. Frye, "CommerceⅢ: In the Parthian and Sasanian Periods," *Encyclopaedia Iranica* vol. 6, pp.61-64参照。
- <sup>46</sup> N. C. Ritter, "Vom Euphrat zum Mekong. Maritime Kontakte zwischen Vorderund Südostasien in vorislamischer Zeit," *Mitteilungen der Deutschen Orient-Gesellschaft* 141, 2010, pp.143-171参照。
- <sup>47</sup> Jamsheed K. Choksy, "Sailors, Soldiers, Priests, and Merchants: Reappraising Iran's early Connections to Ceylon," *Iranica Antiqua*, Vol. XLVIII, 2013, p.367参照。
- <sup>48</sup> Choksy 2013, p.369参照。
- <sup>49</sup> Choksy 2013, p.371参照。
- <sup>50</sup> 日本語の概説としては、足利惇氏、「マカ婆羅門について」、『インド学仏教学研究』、第3号、1953年、pp.92-100参照。標準的な研究としては、Heinrich von Stietencron, *Indische Sonnenpriester: Sāmba und die Śākadvipya-Brāhmana: Eine textkritische und religionsgeschichtliche Studie zum indischen Sonnenkult*, Wiesbaden, 1966参照。最新の研究としては、Martina Palladino, "The Sun-Worshipping Śākadvipya-Brāhmanas: An Analysis of their History and Customs from Ancient Times to the Present," Doctoral dissertation, University of Bologna, 2017参照。
- <sup>51</sup> 永井悠斗、「ブトレマイオス『地理学』中のマカ関連記述の批判的検討」、日本宗教学会第79回学術大会発表レジュメ、2020年9月19日参照。
- <sup>52</sup> Choksy 2013, pp.368-369参照。
- <sup>53</sup> 同様の現象は、20世紀前半の極東でも起こっている。ボンベイから上海や神戸へのパルスイーの貿易路の伸張に伴って、ボンベイのゾロアスター教神官が上海や神戸に常駐または巡回していた。
- <sup>54</sup> 架空の「緑の預言者」ヒドゥルについては、Patrick Franke, *Begegnung mit Khidr: Quellenstudien zum Imaginären im traditionellen Islam*, Stuttgart, 2000参照。
- <sup>55</sup> Vaziri 2012, p.74参照。